

# 社会が病気をつくる——「持続可能な未来」のために

著者：玉城 英彦 (たましろ・ひでひこ)



国立病院機構沖縄病院 院長 石川 清司

1948年生、沖縄本島北部、古宇利島が著者の出生の地である。国立水俣病総合研究センター、そして長年のWHO本部勤務の後、北海道大学医学部において教鞭をとっている。疫学・国際保健学分野を専攻。「恋島への手紙」(新星出版、2007年)、「世界へ翔ぶ一国連機関をめざすあなたへ」(彩琉社、2009年)に継ぐ著書であり、現代社会に対する彼の警鐘でもある。

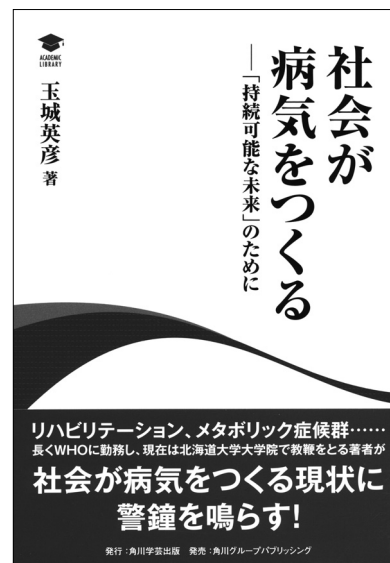
沖縄県医師会史一祖国復帰から新会館建設まで一の編集作業が進行している。その中で、1995年の「沖縄県長寿の検証と世界長寿地域宣言」開催に際して、WHOの中嶋宏事務総長の招聘にあたり著者が仲介の役割を果たしたことが記載されている。グローバルな著者の視点は、15年余にわたるWHOでの活躍の舞台に根ざしたものである。

本書の構成は、1. 社会が病気をつくる、2. WHOの「健康の定義」とは、3. 保健政策と健康、4. 健康観の変遷—病気の治療から福祉転換まで、5. ヘルスプロモーション、6. 「持続可能な未来」のためにとなっている。まさしく、高度経済成長の時代の終焉と少子高齢化社会における「健康で文化的な生活」を維持するための方向性と個々人の果たすべき役割、意識の改革に関して持論を展開している。

戦後の混乱期に結核が蔓延し、多くの若い命が奪われていった。貧困を背景にした衛生環境が生んだ感染症であった。高度経済成長の時代は、感染症から生活習慣病へと疾病構造の変化をもたらした。世界的には、エイズという疾患もまた社会が生み出した疾患と言える。得てして病気は、社会的弱者をターゲットにして猛威を振るう。疾病への挑戦は、格差社会の是正、貧困の撲滅と衛生環境の改善への視点を忘れてはならない。

著者の行動の原点は、「グローバルに考えて、ローカルに行動する」とする考え方にある。一つの生命には限界があることを自覚する。しかし、自然は、社会は、そして健康は未来へと持続する方向性を堅持しなくてはならない。社会の諸々の構図の中で、法律の網から漏れた者に対してはローカルに最善の処方を下すことの必要性を強調している。

キリストの十字架が長い縦の線と短い横の線から構成されていること、そしてこの二本の線の接点で人間がもがいていることを表現しているのかもしれない。「持続可能な未来」を目指す方向性と渡り鳥が羽を休める横の線の接点は、二本の線がいずれも不可欠なものであることを解説している。この著者の思想の原点が、沖縄本島北部、古宇利島という小島に映された夕陽が心を癒す役割を果たし、昇る朝日に夢を託した偉大な自然の力にあるのかもしれない。



アカデミック・ライブラリー  
社会が病気をつくる——「持続可能な未来」のために  
玉城 英彦 著 (角川学芸出版：2010年)